

最近あえて敬語でしゃべることを心がけているのが安達高。名前のとおり一番背が高い。

三人は三年生で、年が明けて二月に受験が待っている。敬二の言うとおり、史則はどの高校にも引っかけたいなかった。焼肉どころか辞書を食べても追いつかない。

「なんだよ高は。アスリートでも目指してんのか」

「いやいや、ぼくは文科系ですから」

「食べ放題行こうよー夢ホルモン行こうよー。明日から本気出すからさー」

杏橋商店街の端にある夢ホルモンでは、すでに八グループが席の空くのを待っていた。もとは大きなファミリレストランで、二年前、焼肉食べ放題の店に変わった。安いからいつも混んでいる。学生だけでも入りやすい店だ。「だいたい明日から冬休みなんだから、多いのは予想できただんだよ」

「まあまあ、メニュー見て待とうよ。うひょーうまそー」

「史則君は参考書読んで待つのはどうでしょうね」

ただよう肉の焼けるにおいて、妄想の中すでに二杯目のライスを平らげた史則には、高の忠告はまったく耳に入っていない。残った者が現実世界の話をするしかなかった。

この二学期までの成績が内申点になって、受験のある程度を決める。今日あっけらかんと見せてくれた史則の成績表の、きれいにそろった数字を思いだして、敬二と高は他

人事ながら心配がつのる。

「冬休みに勉強を見てあげましょう」

「それでなんとかなるかなあ。おい史則、どこ受けるんだっけ？ 史則！」

すでにデザートまで妄想三回転がすんだ史則は、きょう初めて会ったかのように敬二の顔を見た。

「なんだっけ、こういう目」

「バカ目です。おつけの実にもならない」

国語の教師が落語好きで、ときどき小咄を教えてください。バカ目は味噌汁の具になるワカメに掛けている。

「えっと、瓜実商業」

「なら、なんとかなるんじゃないか」

「どうでしょう。史則君はわれわれの予想をいつも大きく裏切ります」

テーブルが空いた。こうなると残り二人もふつうの男子中学生。脂と米にひたすら心を奪われる午後だった。

夢ホルモン夢の二時間コースを終えて三人は店を出た。

家に帰る方向は別々だ。史則は最新しく舗装された北へむかう道にむかった。しばらく行って声をかけられた。

「岡田ー」

高くはあるが太い声にふりかえると、同じクラスの新島美咲が自転車に乗ってやってくる。ショートカットで、こ